

ゴアレーベンの市民グループ

**環境保護 Lüchow-Dannenberg の**

副理事長 Elisabeth Hafner-Reckers 氏による

2017年3月11日福島6周年ベルリンかざぐるまデモ  
での演説



©Tsukasa Yajima

デモに来ているみなさん、今日、世界中で福島原発事故6周年記念の日が集まったみなさん。

フクシマでは、コントロールすることのできない自然とコントロールすることのできない核技術とが遭遇して、原発周辺に恐ろしい事態をもたらし、その悪影響が世界中にも広がってしまいました。

そしてそのあとには、原子炉核溶融が起きるときにはいつも繰り返される同じパターンで事が進んでいきました。まずは驚愕、理解の域を超えているという感情、揺り起こされようかのような感覚、それからまた徐々に始まる、そのことを考えまいとする抑圧。あまりにたくさんの方が起こりすぎると、そんなにたくさんの危険に長い間直面して生きていくことが私たちにはできないからです、ことに自分が直接その被害に遭っていない場合には。

そしてそれも実はありがたいことかもしれません。でも、私たちはこれらの出来事から警告を得、目を覚まし、起こってしまった災難、起こる可能性のある災難、おそらく起こるであろう災難をどうしたらいいのか考える力を得ていくのです。

私たちは、世界中のたくさんの方たちと一緒にあって、エネルギーを産むほかの方法を取り、ライフクオリティの高い（経済）成長を要求していただくだけの心の準備のある現実主義者です。

数からみればまだ少数のイニシアティブかもしれませんが、それでも私たちは賢く、自然に寄り添った形で地球の天然資源を扱っていけば、必ず物理的にも精神的にも満足感を味わえるようになる、天然資源をただ無駄遣いして得る経済成長などでは、そういう満たされた人生は得られないのだということを、絶えず示していきます。

天然資源を消耗するだけの経済成長など、一瞬めらめらと燃え上って熱くなるものの、すぐに消えて灰と冷たさしかあとに残さない、藁を燃やす火に過ぎません。そしてそれは、人間の内面に関しても、外面に関しても言えることです。

私たちが欲しいのはそれ以上のものです。私たちが欲しいのは、長く持続する暖かさです、誰にでもこれならいい、と思える暖かさです。

私たちは、それは本当に実現可能なのだということをはっきり知っている現実主義者です。私たち一人ひとりが、人生と生命のその多様性と繋がっていると思うからこそ、だからこそ、私たちはここに立っているのです。

私たちはすべてをはっきりその目で観察し、何が行われ、行われようとしているかその背後を絶えず探り、それから行動します。小さい枠組みにおいても、大きな枠組みにおいても、です。私たちは40年以上も、あらゆる運動で、あらゆるレベルで反論を訴えながら、軽率な理由でサイト候補に選ばれたゴアレーベンに抵抗してきました。

「視界から消えればもう考えない」式に短絡的に捉えた解決策しか頭にない彼らの弱点、今度はゴアレーベンを最終処分場サイト選定法により、数ある解決法の一つでもあるかのように提示してみせている彼らの弱点を私たちは暴き続けます。

私たちは目を凝らして警戒し、『新しき葡萄酒を新しき皮袋に盛れ』（マタイ伝の句）を実行するよう何度でも切に要求します。これはどういうことかというと、ゴアレーベンに放射性廃棄物の最終処分場サイトになる可能性があるという考えは、古いワインを古い革袋に入れることに異ならないと認識することであり、それをはっきりと言及し、これはただの「アイデア」のままにして、いい加減にこのようなアイデアをこそ最終処分する（永遠に葬る）よう要求するということです。

なぜなら、私たちはこれから、その他のエネルギーを開発していくために力も、時間もまだまだ必要だからです。

短距離輸送、地域で作られた製品に優れたネットワークなど、小単位で考えることの長所を何度も試すべき時が来ています。

私たちはくじけずにその実現に向けて突進し、証明できる事実を総動員し、想像力を駆使し、なにがどのように繋がっているのかを根気よく説明し、政治に迫り続けます。

そうです、私たちはとても礼儀正しい運動を行っているのです、私たちは、すばらしい恩恵をもたらすと宣伝されている原子力エネルギーに対して、ただひとつだけのことを、これからも声高に、はっきりと言いつけるのです：

原子力 – いいえ、お断り！

原子力 – ナイン、ダンケ

[Sayonara Nukes Berlin](#)